

# 沈黙のころ

## 一、母の味と沈黙の味

「母親がもっと言葉を少なくして見守る忍耐をもち、沈黙の意  
味を悟り、父親がもう少しさりげない表現を多くし、ユーモアの  
味をかもしだすようにしたら、日本の家庭はもっと安定し、子ど  
ものしつけもうまくいくだろう」私はいつもそう思う。事実しあ  
わせな家庭とか、成熟度の高い安定した家庭、すくすくと情緒豊  
かな子どもが育っている家庭は、おおむねそういう家庭のようだ  
し、問題の起こりやすい家庭はそうでないように思われる。  
母はお袋と呼ばれるように、おおらかでどっしりとして、何も  
のをも抱擁し、いつも心のよりどころとなるもの、とくに人生の  
旅に疲れ、やるせない思いにひしがれたとき、それをやわらげい  
やしてくれるものである。

ふるさとの山に向かいて言うことなし

ふるさとの山はありがたきかな

啄木のこの歌の心も、母なるふるさとへの郷愁と心の痛みをい  
やされた感慨にほかならない。囚われの身の人々の詩歌や俳句に  
共通しているのは、母でありふるさとであることは周知のところ  
である。そのお袋とかふるさとのイメージは、ガミガミイライラ  
した言葉の多いものでなく、むしろ無言の味わいではないだろう  
か。

かたくなな我の心に灯をともす母に会いたき日々を過しぬ

乳しぼり乳の香りに母さんをふっと思えり暗き牛小屋

山煙る雨となりたる夕食後母恋う思にただ走りつぐ

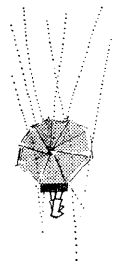
さびしければ大声あげて母と呼ぶ山みな眠りこだまなき夜

落書の母という字のなつかしく母在る如く壁に物いう

背の傷のわが思出のはるかにて悪童の日は母を泣かせし

切々とした母（ふるさと）への思いが、彼らのさいなむような

森 田 宗 一



過去の罪過への痛恨をやわらげ、新しい人間的な心情を蘇らせてくれるのである。

母を思う心は、必ずしも肉親の母親を慕うだけでない。母を象徴するものは、たえずその対象となる。ふるさとの山河、どこまでも続く草原、黙々とした砂丘、ゆうゆうと流れる大河、静かな海、うねうねと連なる山並、いずれも母を連想させる。とりわけ春先草木の萌えいでる前の畑の起伏や丘のようすは、母そのものの、まさに母なる大地である。そのいのちをはらんだ沈黙の大地に、人は大いなる母性を感じる。そういう光景を眺めて、あっ！お母さんのようだ」と叫んだ少年がある。それが彼の更生への転機になったという。なつかしい母の体への連想でもあろう。その豊かな体の内に無限の生命をはらむ静かな大地は、人の心にいのちへの敬虔さを悟らせる。

ものの芽をふふむ大地に畏れ行つ

私も同じような大自然の光景に接して心うたれ、こんな句をつかったことがある。その畏れの思いに続いたものは、いのちの源である母、わが心のふるさととなる母への慕情と畏敬の心だった。

「自分は、父から人生を必死に生きぬく力、天をあま翔る力を学び、母からは大地の味を学びました」というインディラ・ガンジー夫人の言葉は、まことに含蓄がふかいと思う。この大地の味という言葉の中には、偉大なる沈黙と深い祈りといったものがこ

められているようである。いつの世も親が子に伝えるもの、子が親から学ぶべきものの最大なものが、ここに語られていると思う。この頃のわが国では、母親がこまかくうるさすぎ、母親がいるためにかえって家庭がホッとできない、安定感がないという子どもがふえている。あまりに言葉が多く、「お勉強」とか「しつけ」「おけいこごと」などに、お説教が多い。そのために子どもは疲れ、息ぎれしている者さえ少なくない。「お母さんがガミガミやかまし過ぎ、お父さんが叱るべきときにもさっぱり何も言ってくれない。それが不満だ」などという子どもが多い。人生の経験をふまえた幅のある父親の適切な指南と、母の横顔うしろ姿による無言の教えがほしいのである。それが子どものまことのニード（欲求）というべきものである。

こんな一中学女生徒の日記がある。ある家庭教育資料に掲載されたものだが、心うつものがある。この娘はふだんはたえず母と言い争いをしていたらしい。母親も教育熱心で口うるさく、こまかいことをとりあげて叱る。言葉の多い真向きの関係が悪循環となっていた。ところがある日の日記にこんなことが記されている。

七月十五日 日曜 曇のち雨

「きょうはふしぎな日だった。おふろで、いつも母の背中をこするのがいやでたまらないのに、きょうはこすりたくて、母もたいそうよろこんでくれた。どういふ風のふきまわしやら。わたしは

さいきん母からだんだん離れていくような気がする。小さいときにはどこに行くにも母といっしょだったが、このごろでは別々のことが多い。酵母菌が母体を離れていくように、わたしも母から離れてしまうのではないだろうか。母ははじめはわたしにとつて、なくてはならない人であった。それが今では、あつてほしい人になった。わたしは大きくなることはよろこばなければならぬ。でも、母から離れていくのはさびしい、なんだか母を裏切っているようで、たまらない気がするときがある」

やがて何日かたったある日に、次のような心うつ記載がある。

「学校から帰ってくると、母がいつになく興奮している。なんでも目の見えなくなった女優さんの自叙伝を読んだのだそうだ。目をまっかにしていた。わたしは、読書に興奮して自分の考えをまとめようとしている母の姿をはじめて見た。わたしは母を仰ぎ見る気持だった。」

これこそ新しい母の発見であり、新しい母子関係の再出発である。横顔ともうしろ姿ともいえる母の姿に触れて、今まで言葉多きが故に見失われていた母と子の出会いが、見出されたといつてよい。

## 二、母子像と心

さて、私はいつも二つの母の像を仰ぎ、心の糧としている。一

つは、ある神父さんから贈られた聖母像である。石こうで作られたものだが、ルルドの洞窟をかたどった岩を背景に沈黙の聖母が静かに立っている。キリストの聖母として、天地の元后、天の門、暁の星などとたたえられるこの母は、人類永遠の母の象徴ともされ罪に泣く者を救主にとりつき、たえずわれらのためにとりなした祈りをなし給う方と敬愛されて来た。その聖母像或は聖子を抱いた母子像は、キリスト教の信仰生活を豊かに支えて来ただけではない。二千年の文化歴史を通じ、絵画、彫刻、文学、詩歌、音楽、あらゆる芸術の領域において、人間が表現しうる限りの方法で、その美と聖と豊かさと深さが表現されつづけてきたのである。

ヨーロッパの田舎道でよく見かけた聖母像には、野の仏に感ずるような素朴な沈黙の味があったように記憶する。遊びほうけてその前を駆け過ぎた村童が、何思つか走りかえつてきてその像の前でいそいで十字をきり、また走り去った光景も時々見た。ほほえましく心うつものだった。今も尚あの子どものらの生活の中に生きている聖母像である。

「仰せのごとくわれになれかし」と謙遜に召命にこたえて以来ベツレヘムの星をのぞみ、ナザレの空を仰ぎ、苦難の道たどる教主の母としてゴルゴダの丘に至るまで、沈黙と従順を全うされた母マリアは、私にとっては一般のキリスト信徒のそれ以上のものにさえ思える。自然のままの母的なものにとくべつに弱い者にと

つては、しばしば秋霜の如くまた烈日のようでもある。日々の生活のかなめともなってくれる。

私の毎日仰ぎ見て心の糧としているもう一つは、東京家庭裁判所の正面玄関に安座している母子像である。これは文字通り、どっしりと大地のような母、風雪を耐え腰のすわった日本的な母が、赤子に乳をふくませている姿である。彫刻家向山狭路氏が、自分の母への感謝の念をこめて製作したもの。数年間旧庁舎のせまい入口におかれていたが、新庁舎落成の時、石庭を配した正面玄関のホールの一隅に安定する座を得たわけである。

#### 母子像も所を得たり野菊晴

新庁舎落成を祝つての私の一句は、何よりもこの母子像にさきげたものである。この母子像の大変日本の素肌のままの素朴な味は、われわれ自身の母を連想させる。しかしそれゆえにこそまた万人共通のもの、普遍につながるものである。この母子像の傍には、花崗岩の台座に「心」の一字を大きく刻したいしづみがおかれている。この「心」の字は、弘法大師の筆で、漢の名家崔子玉の座右銘からとつたものである。母子像とともに家庭裁判所の門をくぐる人々の眼にふれる。家裁の象徴といつてもよいだろう。母子像と並んだこの弘法大師筆の「心」を何と解するか。「慈悲心」「菩提心」「菩薩の心」いずれも可なりであろう。「忍ぶ心」もしくは、「誠心」と解するのもよいかもしれない。しかし私は

「沈黙の心」と解し、いと小さき者を「愛惜する心」と注をつけたい。それこそ眞の保育の心であり、教育の精神だと思ふのである。二つの母像に共通するものは、何よりもそういう心であるように思われるからである。

現代という社会は、よろず急ぎ易い騒音の多いときである。情報過多の時代である。人と人との間も、言葉多くしてかえつて理解に遠ざかることが多い。無闇に言葉が乱れとんで生命のこもる眞実がない。今の世界全体が騒音の中の急ぎ過ぎのため、つんのめつていつ谷底へ落ちこむかわからない。能楽でいう「せぬころ」というものが大切なように思う。沈黙の心とはただまわっているということではない。深いものを内にたたえた黙想であり、時あつてはさりげないユーモアに通じるものである。「せぬころ」とは、「言葉、立ちはたらき、物まねの色々、身になすわざのひま」である。「ひまびまに心をすてずして、用心をもつ内心である。この内心の感外においておもしろき也」(世阿弥)。この心こそ、現代の教育に、そして現在の社会に大切なものであると思う。

母の再発見のため、保育の心の再認識のため、私は今日この頃そのことを痛感している。その沈黙の心のあるところから、本当の保育もいのちあるいろいろの業わざも始まるように思われる。